

一〇〇回のありがとう

大窪 純子

和の力で、環を創る。
100TH
MUTSUMI GAKUEN

私は四十五歳で最愛の母を病で亡くし、昔気質の厳しい父の介護を引き継いだ。父はその五年前、七十四歳の時脳梗塞に倒れたが、母の懸命な介護で日常生活に支障のないまでに回復していた。だが父の体調には起伏がある。私は早期仕事に出て夜遅く帰宅するのだが父に、「足が痙攣する。揉んでくれ」と言われると二、三時間続け、洗濯や遅い夕食を済ますと眠れない日もある。朝、「調子が悪い」と父に言われるとギリギリまで様子を看、バスの時刻を睨みダッシュする羽目になる。「親と仕事、どっちが大事や」、父の怒気が追いかけてくる。仕事には責任がある。職場に着くと待ったなしだ。休日は一日中父に付き添う。次第に精神的にも肉体的にも追い込まれていく日々を耐えるしかなかった。そんな時、一どんな辛い状況でも、それはあなたの人生なのだから「ありがとう」と言ってごらんさい。今日は晴れた「ありがとう」、こんな細やかな事で構いません。心にもない「ありがとう」でも構いません。あなたが「ありがとう」を一〇〇回言った時、何かが変わります。そしてそれを続けてください。素晴らしい事が起こります。一こんな内容の本に出合った。仏壇の母に毎朝手を合わせ「ありがとう」は言っていたが、何で心にもない「ありがとう」を言う必要があるのだろうか私は思った。唯一〇〇回目は何が起こるか気になって、始めてみた。回数を数えていたが次第に分からなくなり、有に一〇〇回は越えた頃も何も変化はなかった。がっかりした。只そういう気持ちでいると、愚痴より先にひよいと口から「ありがとう」と出た時には我ながらびっくりした。

そんな初夏の事、八十八歳になった父がそれまで、「お前に言うても分からん」と秘めていた戦争体験を語り出したのだ。海軍での訓練、武器無くジャングルを逃げ惑った時、一足先に走っていた兵隊の足が吹っ飛んだ光景、サイパン、ラバウルと九死に一生を得復員し、食糧難でその日生きるのに精一杯だった事等だ。私は今まで知らなかった二十歳の父に、そして父の青春に出会い続けた。

早期退職し、徐々に父に寄り添う介護が出来るようになった初秋の朝、父の部屋に雨戸を開けに入ったが、返事が無い。「お父さん」、私は叫び続けながら一一九番通報し、父の躰を摩り続けた。救急車が到着する直前、父の閉じた臉が一瞬動き口元が微かに震えた。声は出ない。父は喉を絞り枯れ葉が擦れるような息だけで、「じゅん子……という子が……生まれて……よかった」と言ったのだ。この瞬間私から父への確執があったという間に見事に消えた。「私もお父さんの子で、よかったよ」、父の耳元で泣いた。父に聴こえただろうか。

一〇〇回の「ありがとう」は私の介護を変えた。今朝もこれからも私は母と父に、そして今共に語り合える周りの人達に「ありがとう」を伝え続ける。